



▲II部サッカー部の練習風景

国民を興奮の渦に巻き込んだロンドン五輪でのなでしこジャパンの試合はまだ記憶に新しいだろう。この機会に、サッカーを身近なスポーツだと感じるようになった人も多いはずだ。そのような試合を「なでしこジャパンは、トーナメントに入り、我慢する試合ばかりで、自分たちのやりたい試合ができていなかったのではなか」と厳しく分析するのは、II部体育会蹴球部(以下、II部サッカー部)の主将である小林優也さんだ。

日本でも数少ない理工系総合大学である本学は、



II部サッカー部も平日の活動は神楽坂校舎3号館の屋上の狭い人工芝で行っているが、月2、3回学外のグラウンドを借りて練習をしている。更に、プレイヤー25名のうち約半数がサッカー未経験者だという。このII部サッカー部は10月6日から8日の3日間にわたって、「インディペンデンスリーグ(II部リーグ)」という他大学のサッカーチームとの大会に出場する。練習環境の異なる他大学と同じフィールドで戦うわけだ。今年のII部リーグには本学の他に、上智大学、法政大学、中央大学、慶應義塾大学、早稲田大学、大東文化大学、文教大学、一橋大学と都内の有名大学が名を連ねている。

その名の通り理系の学生で構成される大学である。理系というだけで運動と疎遠な学生が多いと感じる人もいるだろう。しかし、実は本学には多くの運動部や運動系サークルが組織されている。神楽坂キャンパスは狭い土地に多くのビルが隣接しており、運動をする環境が整っているとは言いがたい。そのためグラウンドや広い場所を必要とする部活やサークルは、学内でできる範囲の練習に加えて、学外で場所を借りてのトレーニングも必要となる。

II部サッカー部は昨年、I部体育会蹴球部が部活として参加したため、II部サッカー部はサークルとしての出場だった。昨年は理科大杯で敗退してしまっ。今回、II部サッカー部はこの理科大杯に優勝し、I部リーグの出場権を獲得したのだが、I部リーグにII部サッカー部が出場するのは2年ぶりのことだという。2年前のI部リーグでは、他大学に健闘する良い結果を残すことができたそうだが、他キャンパスよりはるかに不利な練習環境にありながら理科大杯で優勝を勝ち取った今年のII部サッカー部も、他大学のチームとの試合で良い結果を期待できるのではないだろうか。

I部リーグに出場するためには、まず理科大杯というリーグ戦で優勝する必要がある。理科大杯と必要がある。理科大杯とは、神楽坂キャンパスだけでなく野田キャンパス、久喜キャンパスのサッカーチームも含めた全12チームが参加して行われるリーグ戦である。理科大杯には、I部体育会蹴球部が部活として参加したため、II部サッカー部はサークルとしての出場だった。昨年は理科大杯で敗退してしまっ。今回、II部サッカー部はこの理科大杯に優勝し、I部リーグの出場権を獲得したのだが、I部リーグにII部サッカー部が出場するのは2年ぶりのことだという。2年前のI部リーグでは、他大学に健闘する良い結果を残すことができたそうだが、他キャンパスよりはるかに不利な練習環境にありながら理科大杯で優勝を勝ち取った今年のII部サッカー部も、他大学のチームとの試合で良い結果を期待できるのではないだろうか。

大学の屋上の狭い人工芝で行っているが、月2、3回学外のグラウンドを借りて練習をしている。更に、プレイヤー25名のうち約半数がサッカー未経験者だという。このII部サッカー部は10月6日から8日の3日間にわたって、「インディペンデンスリーグ(II部リーグ)」という他大学のサッカーチームとの大会に出場する。練習環境の異なる他大学と同じフィールドで戦うわけだ。今年のII部リーグには本学の他に、上智大学、法政大学、中央大学、慶應義塾大学、早稲田大学、大東文化大学、文教大学、一橋大学と都内の有名大学が名を連ねている。

II部サッカー部は昨年の9月に新しく現在のチーム構成になり、その時の目標が「このチームで何かタイトルを取る」とだったそう。理科大杯の優勝について、まず第一目標を達成したと小林さんはほっとした表情を見せた。

10月のI部リーグが終わると、新関東リーグのリーグ戦がある。全部で45チームが参加し、3部構成で行われる大きな大会だ。小林さんはI部リーグについて、「相手も強い

大学4年生での卒業研究は、それまでの学習内容を生かしつつ、より高度な内容の研究を行うことを目的としている。その中で岡崎さんは現在、現代建築家が設計する白い建築物の「白」という色が持つ意味について調査を行っている。岡崎さんが色について研究しようとしたのは4年生になつてからだという。建築物の模型は形を引き出す



のでそんなに気張らずに自分たちにできることだけを頑張りたい。その結果がついて来ればそれでいいし、そのあとすぐ新関東リーグがあるのだから、それに向けての確認として、(I部リーグを)うまく使えたらいいと思います。」と意気込みを語ります。どうやら、II部サッカー部の戦法は「我慢しなさい」ということではない。試合をする前の言葉には、なでしこジャパンに勝つとも劣らない力強さを感じた。

調査を行って。岡崎さんが色について研究しようとしたのは4年生になつてからだという。建築物の模型は形を引き出すことを主眼に置いていて、白いボードで製作することがほとんどである。素材の決定とつた面が、疎かにされているのではないかと岡崎さんは感じ、そこから興味を持つたそう。

一般に、建築物の色彩決定は周囲の景観や住人などに与える印象などを考慮した上で色を決定しなければならぬため、

非常に難しいと言われている。依頼者が建築物の色を指定しない場合も多く、建築家がこの難しい決定をしなければならぬ場面も多い。岡崎さんの研究は、そういった色彩決定の難しさを解決することの一翼を担っていると言えるだろう。

具体的な研究内容は建築物に関するもののみならず、近代の哲学や文化、社会思想からもたらされた影響についても調査する。また、雑誌『住宅特集』に掲載された建築物について情報収集を重ね、それにより「白」という色を用いる建築家の思いを調査していく。しかし、研究には時に困難も伴う。

岡崎さん自身はこの研究を通して、自身の建築に対する考え方も変わってきた。岡崎さんが日々研究を進めていく中でとりわけ意識しているのが、自分は何に重点を置いて建築をつくっていくのかということだ。また、岡崎さんは「自分の長けている部分や得た経験などは、自分の創作するものに必ず影響する」といいます。特に様々な視点から物事を見る感性を養って

対して背景にしやすい特徴もある。この多様性は他の色では代用できない。このほか「白」という色には時代や地域によつて色々な意味付けが行われていったと岡崎さんは言う。近代のヨーロッパの建築家によって最初に白い建築物が建設されるようになった頃、「白」は「装飾性など多くのものを切り捨てる」という意味を与えられていた。現在日本の建築家の作品に至っては、木漏れ日や夕陽など時間の移ろいによる彩りを映す背景としての役割を担うようになったという。

論文の対象資料である『住宅特集』が刊行されるよりも前から白い建築物は日本に登場するようになり、現在でも多くの白い建築物が建てられている。当時白い建築物に対する日本での印象は「モダンだ」、「洋風である」といったごく限られた認識でしか受け止められていなかった。これは、外国での白い建築物に対する認識とは大きく異なるものである。また認識だけでなく、色彩決定に関しても日本と外国には大きな隔りがある。外国では自然条件やその土地の素材、機能性から色を決定することが多いのに対し、日本では景観などに配慮するあまり同系色の建築物が多くなつてしまつた。



▲取材に応じる岡崎さん

おくことで、4年生になった際の卒業設計や論文に役に立つため、早いうちから何に興味があるのか、何を研究したいのかを意識しておくことが大切だと思ひます」とも語った。岡崎さんは今後も色と建築の可能性についての研究を継続したいということ、そして大学で学んできたことや経験してきたことが建築分野の職に限りず生涯の仕事になれたいという話も語っていた。

普通車も二輪車も学割特別料金でお得!

キャンペーン特典付  
●段階別一括技能予約OK  
●各技能検定料金追加無料  
パック料金だからオーバーした場合でも安心!

\*東京都公安委員会指定\* 実地試験免除

北豊島園自動車学校 KITATOSHIMAEN Driving School  
http://www.kitatoshimaen.co.jp/ TEL:03(3990)1176  
都営大江戸線練馬春日町駅徒歩7分 東京都練馬区春日町4-37-24  
生協との契約はありません。お申し込みは直接当校受付へ